

# 古代都城における二つの形態

都城形態からみた長岡京

網伸也

Two Forms of Ancient Walled City : Nagaoka-kyo Viewed from the Perspective of its Form

AMI Nobuya

はじめに

- ① 成立期の都城——藤原京——
  - ② 奈良時代の都城——平城京・難波京・恭仁京——
  - ③ 山背遷都後の都城——長岡京の実態——
- おわりに

## 【論文要旨】

古代都城において「京」の空間に方形街区が形成されるのは天武朝以降であり、藤原京（新益京）には計画的な条坊街区が造営された。そして、平城京以後の諸宮では、「京」における条坊の存在が既成事実として議論されてきた。しかし、「京」は王権の所在地として周辺地域から視的あるいは理念的に区別される空間であり、方形街区としての条坊の有無は本質的に「京」の必要条件とはならない。実際に、奈良時代における「京」の概念には条坊街区の存在はあまり考慮されておらず、宮を中心に広がる特別な政治領域を「京」として捉えていたことがわかる。そして、宮城を取り囲む「京」に街区が形成される場合にも、計画的に条坊街区が造営される場合と、必要に応じて街区が造営されていく場合が想定できる。

ここでは、まず都城成立期である藤原京の考察を行い、日本の古代都城がいかんにして確立していったかを明らかにし、平城京をはじめとする奈良時代の「京」の実態分

析を行った。その結果、古代都城の構造には、全体の京城条坊プランを計画的に設定し宮城もその計画線の中に収めていくタイプ（計画線閉合型）と、まず宮の造営を行う必要に応じて京城の条坊を施工していくタイプ（中軸線開放型）があることが判明した。厳密に言えば、全体の方形地割計画線を設定する前者のタイプは藤原京と平城京だけであり、その構造原理は形を変えて平安京にも引き継がれたと想定できる。その他の都城は宮の造営が先行し、宮の造営中軸線あるいは東西計画線を基準にして京城街区が形成された。長岡京も宮城の造営がまず先行して行われており、その京城にできるだけ計画的条坊を施工しようとした特殊な都城であったため、構造的矛盾を孕む結果となってしまうと考えられる。桓武天皇の再度にわたる平安京遷都は、特殊な長岡京造営の中で実現することができなかった計画的都城の完成をめざして行われたと考えられるのである。

## はじめに

日本古代における都城の形成については、「京」の実態を把握しておく必要がある。『日本書紀』推古天皇一六年（六〇八）八月条によると、遣隋使小野妹子とともに来朝した裴世清らが「京」に入り、小墾田宮で朝見の儀を行っている。ここに表現された「京」については、小墾田宮が所在するヤマト政権の中枢域を示すと考えられ、岸俊男氏が想定した広義の「飛鳥」に含まれる<sup>(1)</sup>。推古天皇が豊浦宮から遷宮した小墾田宮は朝堂の初源形態をもつ画期的な宮で、南方には蘇我氏によって飛鳥寺が造営されており、少なくとも『日本書紀』が編纂された奈良時代初頭において小墾田宮を取り巻く政治的空間が「京」として認識されていたことを示している。

七世紀中頃以降、難波や近江への一時的な遷都は行われるが、持統朝における藤原宮への遷都に至るまで、飛鳥地域は王権の所在地「倭京」として発展していく。「倭京」の存在形態については、浅野充氏が「大王の宮を中心に緩く結合した王族の他の宮・豪族の宅・その他に存在している寺等の集合体」として捉え、権力施設の集中の結果として徐々に「京」の領域が一定化してくると想定している<sup>(2)</sup>。このような視点は仁藤敦史氏も指摘しており、「倭京」の用語について「条坊制都城とは原理的に異なるものとして位置づけ、天武朝以前において、飛鳥地域に散在する継続的な支配拠点（宮・宅・寺・市・広場など）の総体」として捉えている<sup>(3)</sup>。考古学的には相原嘉之氏が飛鳥地域の遺跡の分布状況を分析し、皇子宮や豪族居館が特定の官衙的役割を果たしながら分散的に配置され、一般的集落は宮から離れて分布する状況を明らかにした。そして、諸施設を有機的に結ぶ道路網が宮と寺院を中心に広域的に展開するが、既存の施設や地形に規制された道路と直線的道路が共存することを指摘した<sup>(4)</sup>。

また、林部均氏は飛鳥・藤原地域の遺構の変遷を時期別に捉え、初期の飛鳥地域の建物群が古墳時代と同じく自然地形の制約を受けていたのに対し、皇極・斉明朝以降には飛鳥宮が正方位で造営されるとともに王権に関わる施設が整備されていき、天武朝に至って藤原地域での方形街区（新城）の造営など周辺地域の計画的整備が進められ、藤原京の歴史的前提となる「京」の成立が認められるとした<sup>(5)</sup>。

都城成立期における「京」の空間に方形街区が形成されるのは天武朝以降であり、諸説あるが藤原京（新益京）には計画的な条坊街区が造営された。そして、平城京以後の諸宮では、藤原京を前提として「京」における条坊の存在が既成事実として議論されてきたといえる。しかし、前述したように「京」は王権の所在地として周辺地域から視覚的あるいは理念的に区別される空間であり、林部氏も指摘するように方形街区としての条坊の有無は本質的に「京」の必要条件とはならなかった。実際に、先述した推古天皇紀の小墾田宮での記載にみられるように、奈良時代における「京」の概念には条坊街区の存在はあまり考慮されておらず、宮を中心に広がる特別な政治領域を「京」として捉えていたことがわかる。そしてこれらの事実から推測して、宮城を取り囲む「京」に街区が形成される場合にも、計画的に条坊街区が造営される場合と、必要に応じて街区が造営されていく場合が想定できるのである。

今回の共同研究において長岡京の実態解明が一つの重要なテーマとなっているが、以前私は学会動向をまとめる中で長岡京条坊について触れ、平城京や平安京の造営計画とは異なる原理で京域が造営される都城の存在を指摘し、長岡京の造営もこれらの都城と共通した側面をもつことを予察したことがある<sup>(6)</sup>。しかし、拙稿は学会動向という性格上考察が不十分であり、古代都城における全体の流れの中でもう一度捉えなおす必要を痛感していた。ここでは、まず都城成立期である藤原京の考察を行い、日本の古代都城がいかにして確立していったかを明らかにする。そ

して、平城京をはじめとする奈良時代の「京」の実態を分析するとともに、長岡京の構造を明らかにし、これらと比較することによって古代都城の中での位置付けを行っていくこととする。

なお、「京」を具体的に考察する着眼点として、条坊施工の実態や羅城門の有無を明確にするとともに、「寺」と「市」のあり方を重視して順次考察していくこととする。「寺」は「京」を荘厳し、王権の精神的モニュメントとして機能していた。「京」が設定されるに際して結果的に京城に含まれる既存の寺院も多く存在し、「京」設定後は在地寺院から京下の寺院として重要な意味付けがなされる。それとともに新たに官寺として造営される寺院は、「市」と同様に都城の造営計画の中に意図的に組み込まれ、王権を維持する装置としての役割を果たしたのである。

また、「京」には多くの人々が集住するが、彼らの経済的基盤を支えるうえで、「市」の存在は欠かせないものといえる。特に古代都城においては、多くの官人たちが独自の経済基盤から切り離され、律令体制のもとに京内での生活を維持していく必要があった。古代都城に官市として設置された「市」は、まさに「官人の私経済と官司の財政を維持し、かつ保護するため」の装置だった。<sup>7)</sup>つまり、官人たちを強制的に集住させるためにも、都城には「市」が絶対不可欠のものといえるのである。このような官市の設定と「京」としての条坊の造営は、密接な関係をもっている。それは「京」の造営計画の中には、宮城とともに官市の位置がまず第一に決定されなければならないためである。

### ① 成立期の都城——藤原京——

藤原京は条坊街区を備えた最初の都城として位置付けられる。藤原宮への遷都は持統天皇八年（六九四）一二月であるが、京城の造営は天武朝初年まで遡るようである。『日本書紀』天武天皇五年（六七六）是年条に「新

城」造営の記載がみられ、天武天皇一三年三月条には「京師に巡行きたまひて、宮室之地を定めたまふ」とあることから、この時点で「新城」の方形街区における宮地の場所が定まったと考えられる。また、持統天皇五年一〇月条に「使者を遣して新益京を鎮め祭らしむ」とあり、以降条坊街区を備えた京城を「新益京」と呼称したことが判明する。

藤原京条坊の構造は、まず大和盆地を南北に貫く主要幹線道路である中ツ道と下ツ道間の中心を宮の中軸とする。そして、両道路間が当時の四里（六〇〇大尺）であることから、一里（一五〇大尺）を方形街区の計画基準線とし、南北条坊の基準としてはやはり当時の東西幹線道路である横大路が利用された。宮はこれら基準となる三道から一里の距離に東西北面をおく二里四方を占地し、基本的にはこの幹線道路を基準とした方眼状の条坊計画線が道路中軸線となり、条坊街区を施工したとされる。<sup>8)</sup>藤原京構造の復原を行った岸俊男氏は当初、半里四方を一坊として中ツ道を東京極、下ツ道を西京極、横大路を北京極とする南北二二条×東西八坊に想定していたが、近年「岸説藤原京」の京外とされる地域から条坊遺構が多く検出されたことから、藤原京の条坊範囲の再検討が行われている。<sup>9)</sup>とくに、土橋遺跡と上之庄遺跡で西京極と東京極と想定される道路遺構が確認されており、これらの発掘調査成果を受けて中村太一氏と小澤毅氏が一里四方を一坊とする南北一〇条×東西一〇坊に京城を復原した。この復原案では整然とした正方形の京の中心に宮が配されており、古代都城の理想形である『周禮』考工記に基づいて藤原京が造営されたと想定している。<sup>10)</sup>

この藤原京一〇条一〇坊説は発掘調査データとともに、養老令戸令の坊長・坊令設置の規定（「凡そ京は、坊毎に長を一人置き。四坊に令一人置き。」）と、職員令左京職条（右京職准此）にある「坊令十二人」を合理的に説明できることから現在有力な学説となっているが、条坊施工時期の解釈や宮内先行条坊遺構の存在など問題点も多く残されている。中

でも天武朝初年に造営が開始された「新城」との関係は非常に複雑で、本薬師寺下層から条坊遺構が検出されていることから薬師寺造営が発願された天武天皇九年（六八〇）一月以前に条坊施工が遡ることが判明している<sup>(1)</sup>。この事実は天武天皇五年の「新城」造営と非常に近い時期に条坊が施工されていることを示しており、宮内先行条坊の存在も含めて藤原京条坊が本来「新城」として造営されたことを示唆している。林部均氏によれば宮内先行条坊や京関連条坊が同一の規格のもとで造営されており、当初は藤原宮の位置が定められていなかった可能性が高いという<sup>(2)</sup>。これら広域にわたる方形街区は天武朝の「倭京」整備に伴って新たに造成された居住空間であり、天武天皇九年五月条の「京内二十四寺」に比定される寺院が条坊施工域を超えて広域に分布するのも、「新城」造営段階の京域が条坊施工域を含む前代からの広域な政治的空間が「京」として認識されていたためである<sup>(3)</sup>。

このような状況の中で条坊施工が開始された「新城」において、当初から全体像として『周禮』に基づく一〇条一〇坊の全体プランを目指して条坊の造営が行われたかどうかは疑問である。天武朝の条坊施工時に宮地が定められていなかったとする林部説に対しては、既に宮内先行条坊と京内条坊の違いを認め、朱雀大路や宮南大路となる「六条大路」が当初から一般条坊路とは異なる構造であったとする井上和人氏の指摘があり、小澤毅氏も本薬師寺や小山廃寺の相対的關係や古道との関係から条坊造営当初から宮の位置が決まっていたとし、条坊制都城の造営という日本で初めての大事業において全体計画プランがなかったとは考えられないと反論している<sup>(4)</sup>。宮の位置については、「新城」の造営が後の遷都を前提とした事業であったならば、前代からの重要な交通路であり条坊設定の基準となった下ツ道・中ツ道・横大路の中心に新宮の造営が予定されていたことも充分ありえると思う。しかし、たとえ宮地が予め定められていたとしても、天武朝の段階で藤原京の全体プランが明確に設計

されていたか否かは現状では不明といわざるを得ない。むしろ、藤原地域における方形街区の計画的施工は、平行・直交する古道を基準として造営計画線が設定されるため、誤差も少なく広域に区画を設定することができるという利点がある。私見を述べるならば、「新城」造営当初はこれらの利点を生かし「京」に方形街区を整備拡大させることが重視されたのであり、少なくとも「新城」段階に全体プランとしての「京極」の概念はなかったと思う。「京極」の概念が生じるのは「倭京」から京域が独立する持統朝以降であり、養老令の記載と対応する一〇条一〇坊の藤原京プランが設計されたとすれば、天武朝末年に宮地が定められ条坊施工域が「新益京」と認識される持統天皇五年前後と想定するほうが理解しやすいであろう。

ここで注目されるのは、藤原京南辺域における発掘調査成果である<sup>(5)</sup>。藤原京左京一一条一坊・右京一一条一坊の発掘調査では推定朱雀大路を挟んで東西五五〇メートル強の細長い調査区が設定され、東一坊坊間路と西一坊坊間路が検出されたが、朱雀大路推定地には南北溝が確認されたのみで道路遺構は検出できなかった。以前の調査では宮城南面から日高山を越えたあたりまでは幅約二四メートルの朱雀大路を確認しているが、飛鳥川から南には和田廃寺など既存の施設に規制されて朱雀大路が施工されなかった可能性が高く、当然羅城門の存在も考えられず藤原京の正面性は不明瞭であった。平城京遷都直前の和銅三年（七一〇）正月に行われた朝賀儀では、天皇は藤原宮大極殿に御するとともに、「朱雀路」の東西に左右將軍が隼人を率い騎兵を従えて分列しており、皇城門外の朱雀大路で威儀を正している。ここで「朱雀路」と記載されているのは示唆的で、朱雀大路が宮城南面の儀式空間としての機能が強く、大路として飛鳥川以南まで规格的に同一幅で条坊路を通じさせる意図はあまり明瞭でなかったことが推測できる。

また、京外から宮へ向かう経路として下ツ道を南下し、宮城南面大路

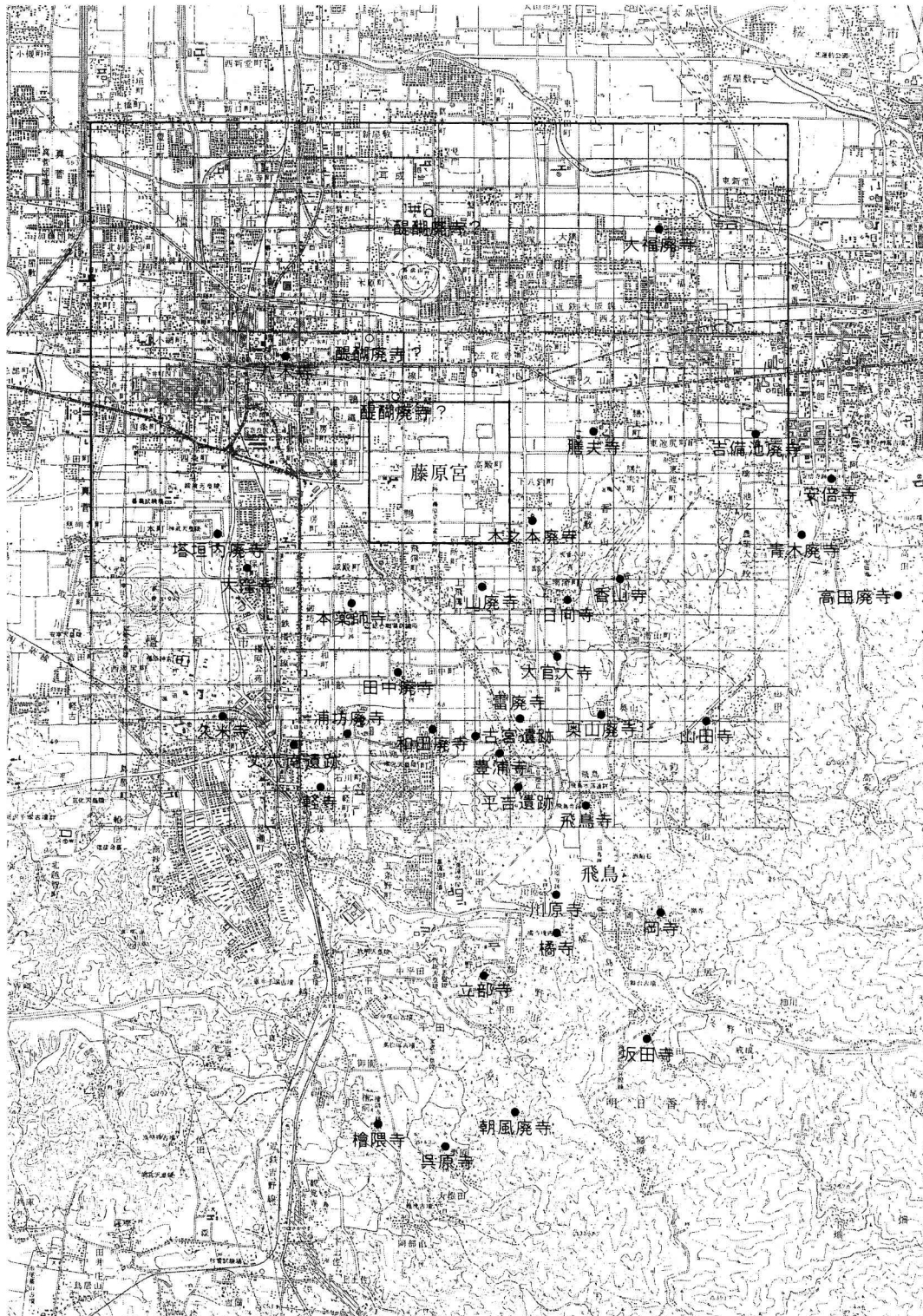


図1 飛鳥と藤原京の位置的関係および古代寺院の分布

である六条大路か、薬師寺南面大路である八条大路を東進して宮の正面に出る経路が想定されるという。藤原京の実態を考えるうえで重要な所見であり、藤原京の南京極の不明瞭さを考えるうえでも非常に興味深い。つまり、藤原京条坊は「倭京」の北西に形成された広大な方形街区が初源であり、もともと飛鳥地域と「京」としての連続性をもつものである。藤原宮への遷都が決まり「新益京」として独立しても飛鳥地域の施設・宅地の整備は継続しており、藤原京は前代からの飛鳥地域との繋がりを維持せざるをえなかったと考えられる。そのため、飛鳥地域との連続性を分断する南京極の設定は廃都まで考えられておらず、むしろ、「京」としての領域が曖昧となる香具山・畝傍山より北の地域で京極を設定することに主眼が置かれたと推定できるのである。

次に、藤原京内の寺院についてみると、宮の前面の八条大路に面して薬師寺と小山麿寺が東西に並んで造営されている。薬師寺は皇后の病平癒のため天武天皇九年一月に発願された官寺で、前述したように「新城」条坊施工後に藤原宮に先行して造営された。右京八条三坊に少なくとも四町あるいは六町の寺院地を占めており、金堂の前に東西双塔を配し、中門から派生した回廊が金堂・双塔を囲んで講堂に取り付く伽藍である。これに対し、小山麿寺は左京八条二坊の四町の寺院地とし、伽藍は中門から派生した回廊が金堂に取り付く配置で塔は東に建てられたようである。先行条坊が確認されていることから薬師寺と同様に条坊施工後の造営であることがわかるが、伽藍規模が薬師寺などに比べて非常に小さく、薬師寺と対応させて同格の官寺とするには躊躇を覚える<sup>16)</sup>。ただ、創建瓦はいわゆる「紀寺式軒瓦」として大和以外にも広く分布する様式であり、寺院地の整備には藤原宮の瓦が主体的に使用されていることから、全くの氏寺であるとも考えられず藤原京造営時に整備された逸名の官寺として捉えておく<sup>17)</sup>。

ここで視点を変えて、高市大寺および大官大寺について考えてみたい。

高市大寺は舒明天皇発願の百濟大寺を高市の地に移した寺院で、後に大官大寺に改称される。高市大寺の位置については現在不明だが、有力な説として雷丘北方遺跡（雷麿寺）が想定されている<sup>18)</sup>。後には東に隣接して文武朝大官大寺が藤原京条坊に基づいて造営されており、遺構は不明だが出土遺物の様相や立地を考えると説得力がある。仮に高市大寺を雷丘北方に比定すると、小墾田宮の北西に大王家発願の官寺が移建されたことになるが、この地は山田道が軽巷から飛鳥へ抜けた北方に位置しており、幹線東西路の一つである山田道からの景観を意識して建立されたと考えられる。つまり、薬師寺が藤原宮へ向かう下ツ道―八条大路ルートからの景観を意識しているのと同様に、高市大寺（大官大寺）は飛鳥へ向かう下ツ道―山田道ルートからの景観を意識して造営されたと推定できるのである。ちなみに天武天皇九年に大寺が定められ、薬師寺と大官大寺も四大寺に列せられるが、同じく四大寺に比定される川原寺は下ツ道から飛鳥御浄原宮へ抜ける東西直線路に面している。飛鳥寺を除く四大寺がすべて天皇勅願寺であり、下ツ道から飛鳥および藤原京へ入る幹線道路を意識して建立されていることは注意してよいであろう。飛鳥の宮と寺は基本的には正面性を南にもつが景観としては西からの景観を意識しており、藤原京も同じように西からの景観を意識して官寺である薬師寺と大官大寺を配したと考えられ、これらの寺院が対となって後に平城京へ移されたのである。

このように藤原京における官寺の配置は、小山麿寺の位置付けが明確でないが薬師寺とともに大官大寺（高市大寺）が重視されていたのは明らかで、藤原京が飛鳥と不可分の関係にあるとともに官寺の配置が条坊造営の中で計画的に決められていなかったことを示唆している。そして、同じような関係は藤原京の「市」のあり方にも現れている。

藤原京では「新益京」として成立した造営当初には官市が設けられておらず、海石榴市や軽市など古道の巷に開かれた市が前代から引き続き

て利用されていた。<sup>(19)</sup> 京内に東西市が設けられたのは『扶桑略紀』によると大宝三年（七〇三）になってからで、これは大宝令の制定に伴い藤原京が右京と左京に分けられたのに対応している。<sup>(20)</sup> 東西市は宮の北方に所在したことが宮北面中門の調査で出土した木簡から推定されており、現在でも耳成山の北西で米川が北に流れを変える地点に市杵島神社が鎮座していることから、米川の水運を利用して新たに東西市が開かれたと考えられる。これら藤原京の市の成立過程をみると、宮北方の官市の成立は少なくとも大宝年間以降のことであり、藤原京の市が宮の北方に所在することをもって「周礼」にみられる「面朝后市」との関連を説くことはできない。むしろ、条坊施工段階で官市の計画的配置が想定されていたことには、重要な意味を見出す必要があらう。

以上、藤原京条坊について概観し私見を述べてみたが、やはり「新城」段階の方形街区施工においてどこまでの全体プランが設定されていたかが大きな問題となる。「新城」は「倭京」に付属する新たな方形街区として造営されており、当初の条坊は不整形な形態で京極が明確でなかった可能性が高い。<sup>(21)</sup> そして、「周礼」を意識した都城計画があったとすれば、宮地が定まり「新城」条坊が「倭京」から独立した「新益京」として再整備された段階に、都城の全体プランも再構築されたと考えるのが最も妥当であらう。この時に初めて「京極」の概念と「京」の中軸が意識され、京極路が設定されるとともに条坊街区が左右に分離し左右京職が設置されていたと考えられる。

なお、藤原京条坊の設定において造営計画線を正方形に設定し、この計画線から道路幅を割り付ける「分割地割」条坊が成立したのは重要である。<sup>(22)</sup> この造営方式が後の平城京に引き継がれ、最終的には後述するように「集積地割」条坊とされる平安京の造営に形を変えて継承されるのである。その一方で、宮が造営されることによって宮の周辺に京城が成立し、必要に応じて方形街区を施工する「新城」と類似した「京」の形

態も伝統として残っていく。奈良時代はこの二つの都城形態が共存した時代と想定でき、構造的に特殊な形態をもつ長岡京の造営もこの流れの中で認識することが可能である。本章ではこれらの問題を検証するため奈良時代の都城を検討し、古代における二つの都城形態を明確にしたい。

## ② 奈良時代の都城——平城京・難波京・恭仁京——

和銅三年（七一〇）三月、元明天皇は藤原から平城への遷都を行った。平城京遷都については文武朝末年である慶雲四年（七〇七）二月に遷都の事が議されており、平城京遷都の詔は元明天皇即位直後の和銅元年二月に出されていることから、平城京造営に二年以上の準備期間があったことがわかる。遷都詔によれば「平城之地」が四神相應に叶うことを愛でるとともに、造営にあたっては予算を計上し、施工時期も秋から「路橋」の造営を開始するようにとの配慮がなされている。また、「制度の宜しき、後に加えざらしめよ」とあるように、綿密な造営計画が設定されていた。造営官司は造営省と造京司がそれぞれ宮城と京城を分担して造営にあたり、新しい宮城北闕型の都城として計画された。条坊街区の造営も早くから着手されたようであり、遷都詔にみられる秋からの「路橋」の造営に対応するように、造平城京司が和銅元年九月に任官されている。とくに、長官に任官された阿倍朝臣宿奈麻呂は算術に長けた人物とされており、条坊設計との深い関わりが想定できる。<sup>(23)</sup>

平城京の条坊施工をみてみると、藤原京と同じように一坊一五〇〇大尺の方形地割基準線に基づいて計画的に条坊が設定されている。<sup>(24)</sup> 京の中軸線は下ッ道を踏襲して朱雀大路が造営されており、朱雀大路を中心に南北九条、東西各四坊の整然とした方形街区を形成し、東には南北四坊×東西三坊の外京が取り付く。最近の発掘調査によれば左京の九条大路の南で奈良時代の初めに埋め戻される条坊街路遺構が発見され、平城京

も造営当初は藤原京と同様に一〇条街区の計画であったのを何らかの理由で九条に変更されたのか、京外離宮との関係から特殊域として条坊街区が造営されたのか新たな問題が生じている。<sup>(25)</sup>ただ、藤原京との相違点として明確な「南京極」の認識が成立しており、造営は遅れるが平城京の正面となる九条大路には羅城を伴う羅城門が建てられた。羅城門の規模は正面七間に復元されており、皇城正門である朱雀門を凌ぎ「京城門」としての威容を誇っていたと考えられる。<sup>(26)</sup>また、朱雀大路や二条大路など京内中心路の隔絶性が藤原京よりも大きく、羅城門を入ると幅七四メートルほどの朱雀大路が南北に走っており、京の北端中央に平城宮が位置していた。平城宮は藤原宮と同様に二坊四方だが、東に京と類似した張り出し部をもつ。これら平城京にみられる新しい構造は、古くから指摘されているように唐長安城を指向した結果として捉えられるが、それとともに藤原京との多くの類似点が指摘でき、藤原京を止揚した計画的都城の姿を平城京の中に見ることができるといえる。<sup>(27)</sup>

ところで、平城京の造営計画線と条坊路の関係について山中章氏は、大路では道路心に計画線がくるが小路では側溝に計画線がある事例を紹介し、大路を中心とする条坊の骨格は早く完成していたが小路は同時施工ではなく、宅地造営とともに条坊計画とは一体性が乏しいことを指摘した。<sup>(28)</sup>しかし、武田和哉氏は平城京では同一条坊でありながら場所によって幅員が異なったり、直線的施工とは考えられない事例が確認されていることを検討し、第一段階の条坊計画線の割り付けは同じ規格で行われたが、第二段階の条坊幅員は様々な設定でなされたために実態として不統一な条坊が形成されたとしている。そして、現状では山中氏が提起した側溝型条坊の可能性を完全に否定できないが、調査データの試算を概観すればすべて従来の道路中心型条坊で、外京も含めて平城京全体が同じ造営基準で計画された可能性が高いとした。<sup>(29)</sup>平城京は条坊幅員の複雑さだけでなく、基準線から個々の大路・小路の占有幅分を割り振るため、

幅広の大路に面し宮城に近い宅地ほど宅地面積が狭くなるなど、条坊計画の構造的欠陥がより鮮明になっているといえる。

また、井上和人氏も山中氏が提示した平城京の条坊データを再検討し、条坊計画線が正しく道路心に位置することを再確認している。<sup>(30)</sup>ただ、小路については側溝中心距離で二〇大尺のものと二〇小尺のものがあり、条坊造営が和銅六年四月の度量衡改定によって基準尺が小尺に統一されて以降にも継続して行われていたことを示唆するとともに、東院地区南面中央門（建部門）の下層で東二坊坊間西小路にあたる二〇小尺幅の東西側溝が検出されていることから、東院の造営も和銅六年以降で平城京遷都時には造営計画がなかった可能性も指摘している。<sup>(31)</sup>

平城京遷都は遷都詔が出されて二年ほどで行なわれたが、遷都翌年の九月でもまだ「宮垣未だ成らず」という状況であった。中央区の第一次朝堂院の大極殿は平面プランの検討から藤原宮の大極殿が移築されたと考えられており、早い段階で造営されたことがわかる。<sup>(32)</sup>しかし、東区の第二次朝堂院は遷都当初から掘立柱建物で造営されており、宮大垣に先行して仮設の掘立柱大垣が南面大垣や西面大垣で検出されている。平城京は都城計画が予め綿密に行われており、宮城内に御在所である内裏が造営された段階で遷都が行われたが、実態としては完成にはほど遠い状況で、遷都後も設計プランに従って継続的に施設の造営が行われていたと考えられる。そして、平城京城においても造営基準線の設定は早くに施工されたが、街区の造営は遷都後も継続的造営を行うことによつて徐々に体裁を整えていったのであろう。発掘調査成果によれば、長屋王邸宅のような四町宅地は平城遷都当初から宅地が確保されており宅地内小路が施工されない一方で、京全体の居住実態は極めて低かったことが指摘されている。<sup>(33)</sup>

このような状況は平安宮においても認められ、平安京遷都後に大極殿・朝堂院・豊楽院と一〇年近くかけて順次造営された様子が文献史料や軒



瓦の分析から指摘できる。<sup>(34)</sup> また、初期平安京の実態も左京南東部や右京西部から南西部の街区は形成されておらず、平安時代全体を通じて徐々に京全体の条坊街区が形成されたことが明らかにされている。<sup>(35)</sup> 平安京条坊は四〇〇年以上の時間幅の中で街区が形成されているが、新たに整備された条坊街区はいつでも非常に高い精度で平安京造営当初のプランを踏襲していた。そして平安京と同様に、平城京も八〇年にわたって高い精度で条坊プランを維持していたのは注目すべきであろう。平城京も平安京も条坊計画基準線がある程度の精度をもって遷都当初に施工されていたと考えられ、全体の造営プランがしつかり決まっていたため、時間を掛けた造営であっても大きな混乱を招くことがなかったのである。

以上のように全体プランが造営当初から設定されていた平城京では、藤原京から移転した寺院や東西市は条坊の枠組みの中に計画的に設置された。薬師寺と大安寺の位置関係は藤原京における本薬師寺と大官大寺の位置関係と完全に対応しており、平城京が藤原京の空間構造を踏襲した一側面を垣間見ることができる。『続日本紀』にみられる平城京への寺院の移建は、靈龜二年（七一六）五月条に元興寺の移建記載が初めてみられるが、「左京六条四坊」とあることから大安寺の誤りと推測できる。その後、養老二年（七一八）九月条に法興寺の新京移建、養老三年三月条に造薬師寺司の史生設置がみられることから、このころに寺院地周辺の条坊街区がほぼ整い藤原京からの寺院移転が集中して行われたと考えられる。とくに、大安寺では堂並僧坊等院が建立される左京六条四坊と、後に塔院が建立される六条大路南の七条四坊に分かれているが、寺院地は造営当初から六条から七条にまたがって占有していたようである。寺院地内を横切る六条大路が検出されていない。<sup>(36)</sup> つまり、六条大路の条坊計画線は当然設定されたであろうが、大路であっても官寺である大安寺の造営予定地であったため寺院地内の六条大路は敷設されなかったことがわかる。これは条坊施工が先行する藤原京（新城・新益京）と大きな相違

点であり、逆にいえば平城京では条坊設計当初から宮城や大規模邸宅・寺院などの位置が予め定められていたということになる。

また、東西市も『続日本紀』和銅五年一二月条に「東西二市に始めて史生各二員を置く」とあるのが初見であるが、すでに職員令に東西市の規定があることや、平城京造営と対応するように和銅元年に和同開寶の銀錢と銅錢が新鑄され、遷都前後に銀錢の廃止と銅錢への統一がなされるなど流通経済の再整備が行われていることから、「新京百姓」の経済的基盤を支える東西市が平城京造営当初から設定されていた可能性は非常に高い。東西市の所在地として東市は左京八条三坊に、西市は右京八条二坊に想定されており左右対称の位置にないが、これは市への物資流通を担った東堀川および西堀川（秋篠川）の流路に規制されたためであろう。藤原京の北方に営まれた東西市も水運に規制されて非対称だったと考えられ、地理的機能性・合理性が重視されて様々な施設が配置される状況は藤原京と通じるものであるが、平城京ではより宮城―朱雀大路に対する対称性が意識されており、計画都城としての完成度の高さを窺うことができる。

このように藤原京の条坊施工技術を止揚発展させ、新たに唐長安城を指向して造営された平城京に対し、聖武天皇が遷都した難波京と恭仁京は構造的な基本原理が異なるといえる。次にこれらの都城の構造について概観してみたい。

難波宮は上町台地上の北端に立地する、中軸線と同じくして造営された二時期の宮殿遺構である。掘立柱建物で構成された広大な前期難波宮は、孝徳天皇によって遷都された難波長柄豊碕宮に比定する説が有力となっている。<sup>(37)</sup> また、上層の後期難波宮は瓦葺き基壇建物で構成されており、聖武天皇によって造営された奈良時代の難波宮であることが判明している。とくに、後期難波宮では『続日本紀』天平六年（七三四）九月条に「難波京に宅地を班給ふ。三位以上は一町以下。五位以上は半町以

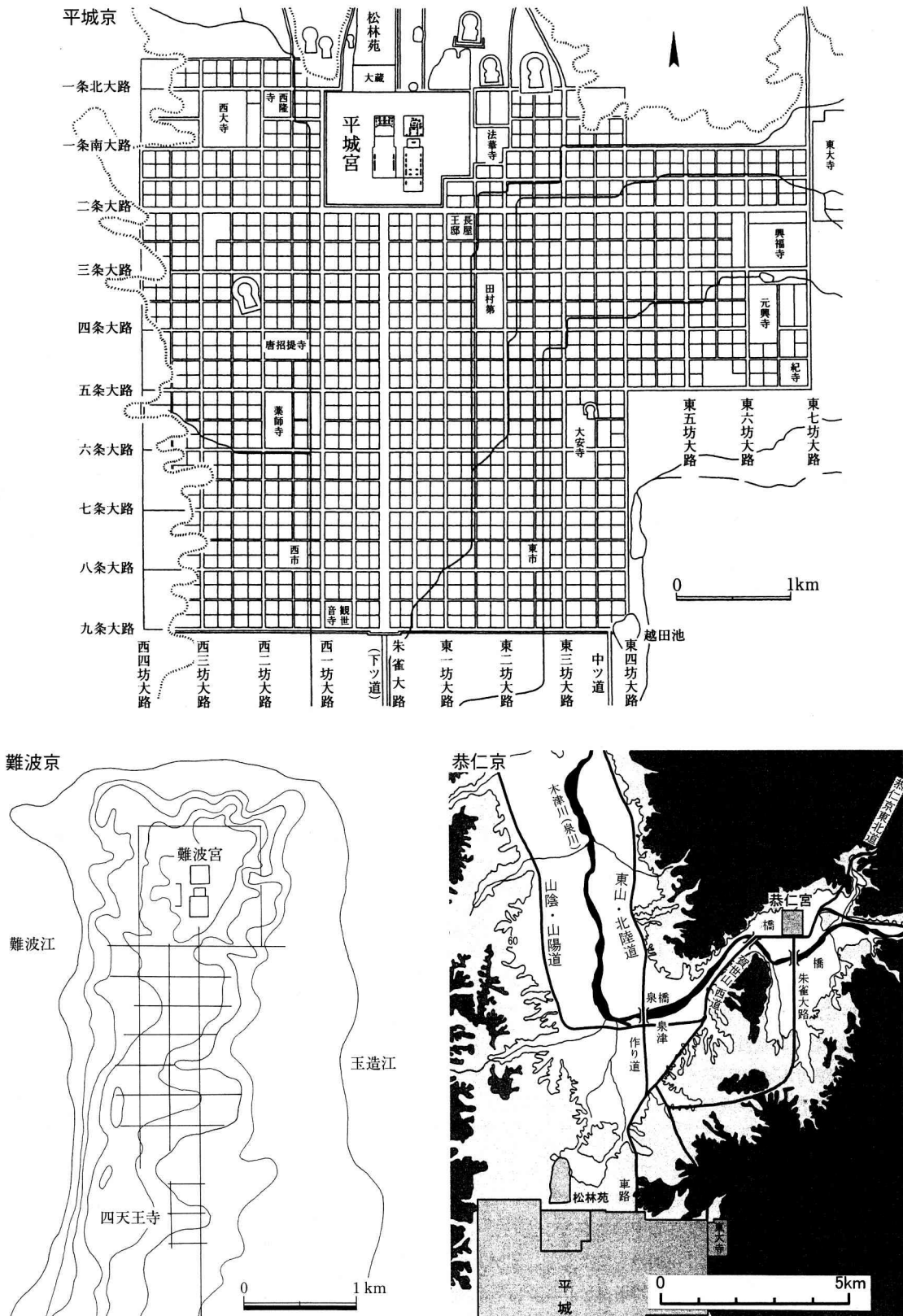


図2 奈良時代都城の諸形態

下。六位以下には一町を四分するの「以下。」とあるように、宅地班給がなされ「難波京」として認識されていた。前期難波宮でも難波遷都に伴う官人層の居住域が形成されたと考えられるが、積山洋氏によれば宮城の南に七世紀中頃に正方位を指向する建物群や整地などの土木事業の痕跡が認められることから、未完成ながら方形地割原理とは異なる「京」の建設が進められたとしている。また、宮城の北側には大川との間の谷地形を利用して長安城禁苑を倣った園林が形成されたと想定しており、内裏前面に一四堂以上を配置した朝廷をもつ異例な宮城構造とともに前期難波宮の強い中国志向が窺えるという<sup>(38)</sup>。

四天王寺の東には近代まで方形地割の痕跡が遺存しており、上町台地の中心を南北に貫く直線道路を朱雀大路（難波大道）として、部分的ではあるがこの直線道路沿いに一辺二六五メートル（七五〇大尺）の方形地割が復元されている。藤原京と同じ大尺による地割から天平六年（七三四）の尺度改正以前の施工と考えられている<sup>(39)</sup>。以前、積山氏は推定難波京域の発掘調査成果を整理し、方形地割による京域の建設が複都構想に対応するかたちで天武朝に着手されたが、難波宮の火災や天武天皇の死去によって未完に終わったこと、聖武天皇の後期難波宮の造営に伴い前代の方形地割を踏襲して京域の建設が進められ、天平六年には宅地班給までいたったこと、京の範囲は従来の諸説とは異なり上町台地上に規制されて東西がかなり短く宮の北にも広がる可能性があることを指摘している<sup>(40)</sup>。難波京の条坊については植木久氏も同様の意見を述べており、七世紀末から八世紀初頭までの時期に難波宮から離れた地点で大規模整地が認められることから、この時期に条坊制が施工された可能性を指摘するが、条坊施工範囲については上町台地に入り込む多くの谷地形による規制が強く非常に限られていたと想定している<sup>(41)</sup>。

前期難波宮は画期的な構造をもつ宮城の造営が主目的となつて進められているが、孝徳朝段階の京域は飛鳥と同様に官人居住域を含む宮周辺

の特殊な空間として把握されたと考えられる。そして、天武朝の難波宮に方形街区が計画されたとすれば、飛鳥に新たに造営された「新城」の影響であることは明らかで、難波宮の京域形成が常に飛鳥の宮の動向と対応していたことを示している。ただ、植木氏も指摘するように細長い上町台地上に計画的な方形地割基準線を設定するのは困難であり、難波大道が上町台地を南北に貫いていることから、藤原京のように複数の直交する古道を基準に方形街区を施工するのではなく、この南北道が基準となる単純な空間構成であったと推測できる。その後、奈良時代に入り聖武朝に造営された後期難波宮では前述したように宅地班給がなされるが、平城京のように左右京に分れる条坊街区を備えた京の存在は考古学的に確認できない。文献史料をみても『続日本紀』天平六年三月条の難波宮行幸に際し、造難波宮司と国郡司らに禄を賜うとともに「難波宮に供奉せる東西の二郡」の田租調を免じており、難波京の管理が東生郡と西成郡に委ねられていたことがわかる。官市である難波市も史料上では東西に分かれておらず、構造的に計画的都城として造営されたとは考えられない。京の造営基準は宮城中軸線（難波大道）とそれに直交する宮城東西線（宮城南面路基準線）となり、京域はこの基準線付近から必要に応じて順に設定されている可能性が高いのである。このような京域設定では部分的な方形地割は認められても、京全体の造営計画線は確認することができず、京極設定も曖昧となる。

なお、『日本書紀』によると天武天皇八年（六七九）一月条に難波に羅城を築く記載がみられる。天武天皇一二年の複都制詔によって前期難波宮が副都となる直前であり、天武朝における前期難波宮の再整備に伴う一連の事業とも考えられるが、この記載をもつて前期難波宮に明確な四至を伴う京の存在は想定できない。羅城の築造は龍田山と大坂山における関の設置とセットであり、摂津・河内から大和へ向かう軍事的防衛ラインの整備に関わるものであろう。実際に難波京は奈良時代において

も不整形な都城であり、羅城門の存在には否定的ならざるをえない。

また、既存寺院である四天王寺や堂ヶ芝廃寺などが京内に取り込まれており、四天王寺旧境内と方形地割との関係も様々議論されている。四天王寺は創建が飛鳥時代に遡る難波最古の古代寺院で、難波長柄豊碕宮への遷都に伴って伽藍が完成したことが明らかになっており、聖武朝難波宮期にも伽藍内整備が行われている<sup>(42)</sup>。前述した方形地割との関係も、方形地割の南北を画する東西路に東門が開くように復元されているが、基本的には寺院地は方形地割に規制されない。つまり、難波宮では宮殿および京域と寺は一体として造営されておらず、寺院地を京の方形地割に取り込むように整備された痕跡は認められないのである。さらに、官市の設置も難波京では難波市を四天王寺の北方に設置しているだけであり、平城京のように東西に官市が分置されていない。宅地班給の規模も三位以上で一町以下と極端に小さく、難波京は条坊都城としての体裁を整えていなかったと考えられる。

そして、奈良時代の都城としてもう一つ重要な位置を占めるのが、恭仁宮である。恭仁宮は天平一二年（七四〇）の藤原広嗣乱の折に聖武天皇が東国へ行幸するが、年末の行幸帰路に急遽遷都が決定された都である。一二月六日に橘諸兄を先発させて遷都のために恭仁の地を経略させ、同月一五日には聖武天皇が恭仁宮に入って「京都」を作らせるあわただしさであった。翌年正月の朝賀では内裏での宴が催されているが宮垣が未完成のため帷帳を巡らしており、大極殿についても同月一六日に大極殿に御して宴を行なった記載がみられるが、翌一四年正月では大極殿が未完成のために「四阿殿」を建てて朝賀を受けており、仮設建物で当座は凌いでいたことがわかる。天平一五年正月には新設の大極殿に御すことができたようで、同年一二月末には大極殿ならびに歩廊を平城宮から移築し始めて四年となり、ようやく宮の完成にこぎつ

けたが、紫香楽宮の造営のために恭仁宮造営を停止する旨が公表された。このように、恭仁宮造営の当初は御在所である内裏の造営が急がれ、それとともに平城宮から大極殿院施設を解体移築して遷都後も造営が続けられたことがわかる<sup>(43)</sup>。この間、太上天皇宮や皇后宮が新造され、天平一四年には宮垣が完成しているが、以上の造営経過をみると恭仁宮造営に際して全体プランとして計画的に造営された様子は認められない。この事実は、実際の発掘調査成果においても確認できる。

恭仁宮は平城京の奈良山丘陵を越えた北東、木津川が蛇行しながら西流する小盆地の北岸に所在する。古くから恭仁小学校の北側に遺存する土壇が大極殿跡と考えられており、宮城はこの大極殿基壇を中心に南に朝堂院、北に内裏を想定して八町四方の宮城が復元されていた<sup>(44)</sup>。実際の発掘調査によって、この土壇が平城宮から移築した大極殿跡であり、後に国分寺金堂に施入されたものであることが判明したが、近年明らかとなった宮城大垣によれば、宮城は東西約五六〇メートル、南北約七五〇

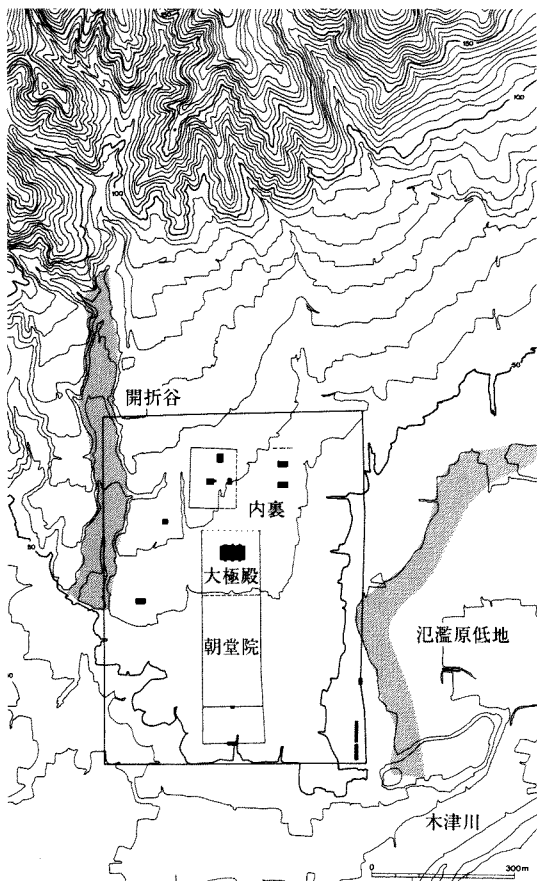


図3 恭仁宮中枢部の遺構配置

メートルの南北に長いやや歪んだ長方形の形を呈しており、当初の復元規模よりもかなり小さいことが判明した<sup>(45)</sup>。これは、恭仁宮の西側は比高差最大三〇メートル近い開析谷が入り込み地形的に宮城西辺を規制することに加え、大極殿東側には西流する木津川が形成した氾濫原低地が迫っているため、結果的に宮城の占有幅が非常に狭くなっていることに起因する。大極殿はこの東西の地形的制約を受けた扇状台地の中心に位置しており、恭仁宮は地形的制約を受けながら大極殿の南北中軸線を基準線として開放的に造営されたと考えられる。

このような造営過程を反映する事実として、朝堂院南東部と宮城大垣南東部が対応するかのよう外側に開いている点が挙げられる。もしも、京全体の方形地割計画が予め直線的に設定されていれば、宮城大垣のラインは方形計画線を基準とするため歪みはあまり生じないはずである。しかし、実際に検出された大垣南東部は屈曲が大きく、相似的に朝堂院南東部も屈曲している。これらの問題を整合的に解釈するためには、宮城の造営が大極殿と朝堂院南門を結ぶ中軸を基準線として進められたと考えるのが理解しやすい。宮城大垣と朝堂院の相似な歪みも、地形規制などから生じた基準線からの測量誤差が同一誤差として朝堂院にも宮城東面大垣にも影響を及ぼしたためと推測できる。また、西面大垣も宮城南半では造営されたが、宮城北半では開析谷の断崖面となり地形的制約から大垣は設けられなかった可能性が高い。

さらに注目されるのは、大極殿北方に東西に並んで検出された二つの内裏相当施設である。これらの施設はともに大垣によって区画されており大型建物が配されているが、宮城造営の基準となった大極殿中軸線とは相関関係にはなく、西側の区画は北に対して東へ振っている。これらの施設の性格については内裏や皇后宮あるいは太上天皇宮などが想定されるが、私見では西側の最も高所に位置し東へ振れる区画が聖武天皇が最初に入った内裏と考えている。前述したように恭仁宮遷都は非常に

突発的に行われ、遷都当初の天平一三年正月では内裏の存在は確認できなかったと思われる。当然宮城施設の全体プランの設計は遷都後に行われたと考えられ、内裏の造営は全体プランとは関係なくとりあえず宮城予定地の最も立地条件の良い場所が選ばれたであろう。西側区画が宮城全体の方位よりも東へ振っている理由も、遷都までの急がれた内裏造営と遷都後の大極殿を中心とする宮城造営の段階差が方位の振れに現れていると考えられるのである。

また、占有面積が非常に狭い恭仁宮では曹司などの各施設を宮城内に全て包括することは不可能で、宮城域とは別に様々な施設が宮城外に分散的に配置されたと想定される。とくに天平一三年閏三月に平城宮の兵器を運ばしめているが、これらの兵器を納めたのは恭仁宮内ではなく、以前より離宮として利用されていた麩原宮であった。

このように宮城の造営が段階的であり、宮の諸機能が分散的に想定できる恭仁宮では都城としての全体プランが計画的に設定されておらず、京域の造営についても同様の状況であったと推測される。例えば天平一三年八月条には平城二市を恭仁京に遷す記載があり、翌九月には百姓への宅地班給にあたって「賀世山西道」の東を左京、西を右京と定めているが、地形的にみて平城京と同様な計画的条坊プランに基づいて方形街区が造営されたとは考え難い。京域の復元案については足利健亮氏をはじめ多くの学説があるが、条坊遺構がほとんど検出されていない現状では詳細は不明で今後の京域での調査成果に期待するしかない。ただ、宮城の四至が従来の復元案とは全く異なり地形的制約を受けた小規模なものであったことが判明し、京域の復元案も理解が困難となっている。

恭仁京の構造を考えるうえで重要となるのは、高橋美久二氏が指摘するように京域を大きく蛇行して流れる木津川に架構された橋である<sup>(46)</sup>。天平一三年一〇月に「賀世山の東河」に橋を架構しており、翌年八月には

「宮城以南の大路西頭」と「麩原宮以東」の間に大橋を造営している。これらの橋は、前者は朱雀道に相当する南北路から木津川南岸へ渡る橋であり、後者は宮城南面大路の西端と木津川南岸を斜めに走る「賀世山西道」とを繋ぐ橋と考えられており、以前より重要幹線路として右京域に架構されていた泉橋とともに、川の都である恭仁京を機能させる重要な役割を果たしたと思われる。とくに宮城が所在する左京北岸域と右京南岸域を繋ぐ大橋は宮城へのアプローチ道路として重視されたと考えられるが、このルートが方形街区に規制されないルートであることは、恭仁京の実態を考えるうえで示唆的である。つまり、恭仁京も難波京と同様に宅地班給にあたっては、直交する主要街路を中心に必要に応じて方形街区が形成されたのであるが、京域全体プランが当初から設定されて造営された可能性は非常に低いと言わざるをえない。このような構造の京域には「京極」概念が物理的に形成されたと考え難く、非常に曖昧なかたちで京域の範囲が設定されたと考えられる。

さらに、恭仁京における市の実態も不明である。平城京の東西市を移設したことは『続日本紀』の記載から明らかであるが、恭仁京において平城京と同様に東西市に分れていたかどうかは不明である。京の経済的基盤となる市の所在地としては、以前から平城京への物資輸送水運の起点となる泉津近辺が最も妥当であり、おそらく水上交通と陸上交通の結節点となる泉橋周辺に西市が設けられたと考えられるが、東市の存在については疑問視している。可能性としては宮城南岸の「賀世山東河」に架構された橋を渡った地点が妥当と思われるが、左京域南半がどこまで京としての機能をもっていたか現状では不明である。とくに、天平一五年正月には恭仁京あるいは難波京が京を定めるために市人に意見を求めているが、この時官人が派遣されたのは恭仁京の「市」であり東西市の存在を示す史料は見当たらないのである。おそらく、市のあり方も平城京のように東西に分かれる形態ではなく、難波京と同様に右京にのみ官

市が形成されていた可能性が高いと思われるのである。

その他、恭仁京右京域には京内寺院として重要な役割を果たしたと思われる高麗寺が所在している。高麗寺は創建が七世紀前半に遡る古代寺院であり、七世紀後半に本格的な伽藍整備がなされた。飛鳥寺あるいは川原寺と同範軒瓦が出土しており、飛鳥地域と非常に関係の深い寺院であったことが判明している。奈良時代の軒瓦も恭仁宮所用瓦や山城国分寺創建瓦などが出土するが数量的に少なく、奈良時代の改修は屋瓦の差し替えなど比較的小規模であったと考えられている。寺院地を区画する施設は部分的ながら南北辺築地の痕跡や東辺築地に取り付く門跡などを検出しているが、恭仁京造営に伴う方形街区によって寺院地が規制された様相は認められない<sup>(4)</sup>。このように高麗寺において京造営に伴う整備の痕跡がほとんど認められない事実は、平城京のような条坊街区を伴わない恭仁京の実態を裏付けるものであろう。

以上、奈良時代の代表的な宮都の様相をみてきたが、宮の位置とともに京域の全体プランが計画的に設定され条坊制都城が形成される平城京と、京域の全体プランよりもまず宮（あるいは内裏）の位置が決められ京域が必要に応じて付随的に造営される難波京や恭仁京の二つの都城の形態が認められる。後者の都城としては、この他、紫香楽宮や保良宮・由義宮も同様の都城として認識できるであろう。

紫香楽宮では近年の調査で朝堂院相当建物が発見されており、地形的に方形地割は無理だが史料的に「京」として認識されたことは明らかである。朱雀路の存在から甲賀寺と宮を結ぶ南北路が基準となる空間構成であったと推測でき、市の西山が火災にあう記載から官市の存在も想定できる。また、由義宮も道鏡による特殊な造営の中で「西京」として認識されており、由義宮造営に伴う河内職の設置や従来市である会賀市を官市に接収して都城の体裁を整えるが、京域における条坊の造営は考えられない。これら宮の周囲に認識される特殊な空間では、宅地班給に

よって一部方形街区を伴っており、榮原永遠男氏は紫香楽宮などにみられる「京」を理念的・概念的な「京」空間として認識している<sup>(48)</sup>。これらの都城に付随する京域は、前代の「倭京」的空間を歴史的に踏襲した形態であり、日本古代都城の伝統的形態と位置づけることができる。

これに対し、宮と京が計画的に設定され方形街区が形成される平城京は、「倭京」に付随するかたちで造営が開始された方形街区を、「周礼」など古代中国の都城概念の実現のため新たな計画都城として造営整備された藤原京を継承止揚したものであり、その構成原理は基本的に平安京へ引き継がれる。つまり、「倭京」から藤原京の造営過程にみられる日本古代都城の二つの形態が、一方で計画的都城として平城京・平安京へと引き継がれるのに対し、一方で従来の伝統的「京」空間が理念的・概念的に構成される都城として、難波宮や恭仁宮を認識できるのである。これらの歴史的背景を踏まえて、最後に山背遷都で造営された長岡京の実態を考察し、その位置付けを試みてみたい。

### ③ 山背遷都後の都城——長岡京の実態——

延暦三年（七八四）五月に遷都のため長岡村の地を見せしめ、翌月には造長岡宮使が任命されて京域の測量と長岡宮の造営が開始される。そして、長岡京遷都は都城造営開始からわずか五ヶ月後であり、遷都から二ヶ月後の翌年正月朝賀には桓武天皇が長岡宮大極殿に御して内裏で宴がなされていることから、従来から指摘されるように平城宮から長岡宮への山背遷都は非常に急がれた遷都であったことがわかる。

長岡宮中心部の構造は、朝堂院が八堂型式であることや、大極殿の東に第二次内裏が造営されているなど、昭和三〇年の「会昌門」の発見以来、五〇年にわたる発掘調査でかなり判明してきたといえる。とくに、朝堂院の調査では難波宮式の重園文軒瓦が多く出土しており、八堂型式

であることなどから後期難波宮の朝堂院を移建したことが判明している<sup>(50)</sup>。その他、長岡丘陵上に官衙関係と想定できる礎石建物などが発見されているが、長岡宮の全体像はまだ把握されていないのが実状である。

山中章氏らの長年にわたる研究によれば、長岡宮の宮城構造は平安宮と同様に縦長の長方形に復元されている<sup>(51)</sup>。とくに、長岡宮の造営が難波宮の解体移築を主体とする前期造営と、第二次内裏造営を主体として平城宮の解体移築が行なわれる後期造営の二段階に想定する清水みき氏の研究を受けて、宮城南面大路が後期造営段階に二町南に移建されて宮城が拡大するとの解釈を提起されている<sup>(53)</sup>。また、宮城北辺の整備に関しては、従来北京極大路と想定されていた東西路が小路幅であることから北一条大路を北京極大路とし、近年発見された「東院」遺構を含めた北一条大路以北を京外の「北苑」と想定する<sup>(54)</sup>。

しかし、北一条大路を北京極大路と想定した場合でも、宮内朱雀大路との交差点で宮城北面中門の位置にあたる宮第三九〇次調査では、北一条大路の両側溝は確認できたが門遺構や宮城大垣に関わる遺構は検出されておらず、むしろ条坊路がオープンな状態であったことが判明しており、北京極の問題は未解決のままである<sup>(55)</sup>。また、宮城東面についても、東一坊大路と一条条間大路の交差点西側で地業跡を確認しており、宮城門跡の可能性が指摘されている<sup>(56)</sup>。しかし、東一坊大路西側溝と一条条間路は確実に施工されているが、門の存在については礎石痕跡や基壇版築など具体的な遺構が検出されているわけではなく、あくまで地業の検出にとどまる<sup>(57)</sup>。

むしろ、長岡宮宮城門として注目すべき遺構は、宮第二六七次調査で検出した南北棟の門遺構である<sup>(58)</sup>。この遺構は朝堂院の西方、朝堂院南面築地から直角に南へ折れ曲がった築地に接続する門遺構で、山中氏が想定する二条大路上に位置する。また、この門から南へ延長する築地跡が宮四一三次調査で検出されており、明らかに宮城を区画する遺構である。

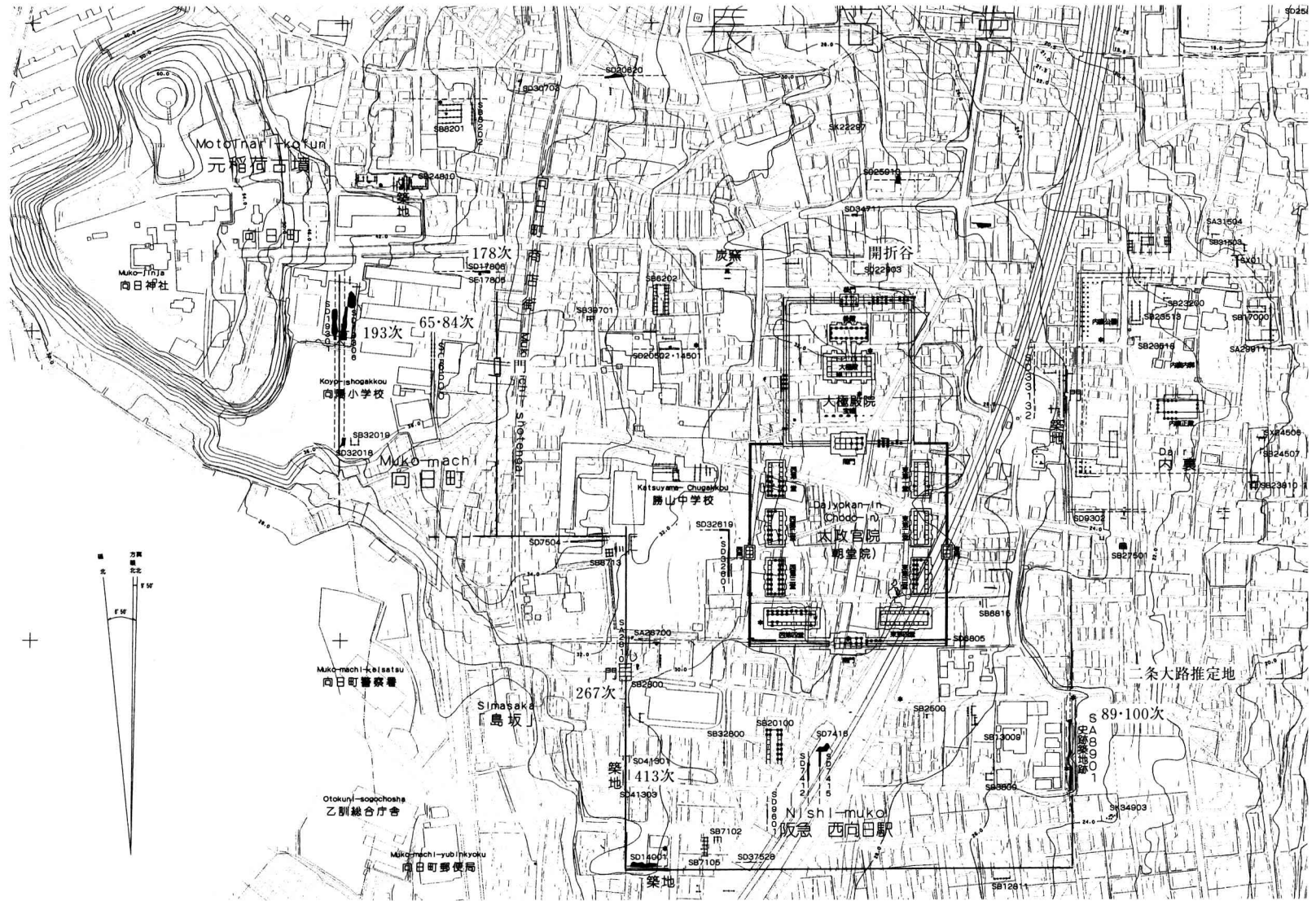


図4 長岡宮中枢部の遺構配置 (1:5000)



これらの門遺構について、山中氏は宮城を二町拡張した段階で二条大路上に新たに建設されたと考えているが、築地は地山削りだし基壇であり朝堂院南面築地との層位的上下関係は認められず、調査所見からは朝堂院南面築地と一連の時期に造営されたと考えるのが妥当であろう<sup>(60)</sup>。この南北築地は長岡京条坊とは全く関係ない位置に所在しており、朝堂院中軸を東へ折り返した地点にも現在史跡指定されている南北築地が存在することから(宮第八九次・一〇〇次調査)、宮城の南面は宮城造営当初から条坊とは関係ない区画で設定されていた可能性が高いといえる。

さらに、宮城西面は小畑川が形成した標高差二〇メートル以上の段丘崖となっており、現状でも元稲荷古墳や五塚原古墳などが丘陵尾根筋に遺存している。このような場所に直線的な宮城大垣を造営することは不可能であり、むしろ、天然の崖面が宮城の西面を限る構造になっていたことは明らかであろう。つまり実態として、長岡宮が平安宮と同様に宮城大垣によって長方形の占地を有していたかどうかは全く不明で、むしろ、宮城が立地する長岡丘陵の地形にに応じて宮城が造営されたと考えるのが自然である。

ここで注目すべきは、長岡宮の発掘調査成果を地理的・地質的視点から検討し、客観的事実から長岡宮の実態を復元しようとする國下多美樹氏と中塚良氏の研究である<sup>(61)</sup>。長岡丘陵が西から東へ緩やかに傾斜する段丘であることから、長岡宮は最も高所である西から雑壇状に整地されて宮城の占有地が順次形成されていったと考え、「西宮」と呼ばれた第一次内裏を長岡丘陵上で最も景観がよく高所に位置する元稲荷古墳の南東側、現在の向陽小学校敷地内に想定している。従来、長岡宮第一次内裏は朝堂院の北側に想定されていたが、大極殿の北側には深い開析谷が走っており内裏推定地としては地理的に条件が悪い場所である。実際に朝堂院北側の地区で数次にわたる立会調査などが行われているが、内裏に関係する遺構は全く発見されていない。それに対して、向陽小学校敷

地内では南北方向の複廊と門が検出されており(宮第六五・八四次)、複廊の東には東面する礎石建ちの門遺構も発見されている。

また、向陽小学校敷地西端部で行われた宮第一九三次調査の成果も、当地域の性格を知るうえで重要な所見となっている。この調査区は元稲荷古墳や向日神社が立地する丘陵最高所から東へ下がる崖面下に位置し、長岡宮造営時の整地層と南北築地の両側溝と考えられる南北溝が検出された。この築地は前述した複廊から約七五メートル(二五丈)となっており、向陽小学校敷地の平坦部が狭いながら長岡宮造営時に形成されたことを暗示している。そして、整地層など造営当初の遺構から出土した土器組成の九〇パーセント以上が奈良時代(平城京期)のものであることから、長岡宮造営にあたって平城宮から土器が運ばれた可能性が指摘されており、長岡宮初期造営に関わる地域であることを示唆している<sup>(62)</sup>。ただ、出土瓦の傾向をみると、難波宮式が過半数を占めるが平城宮式軒

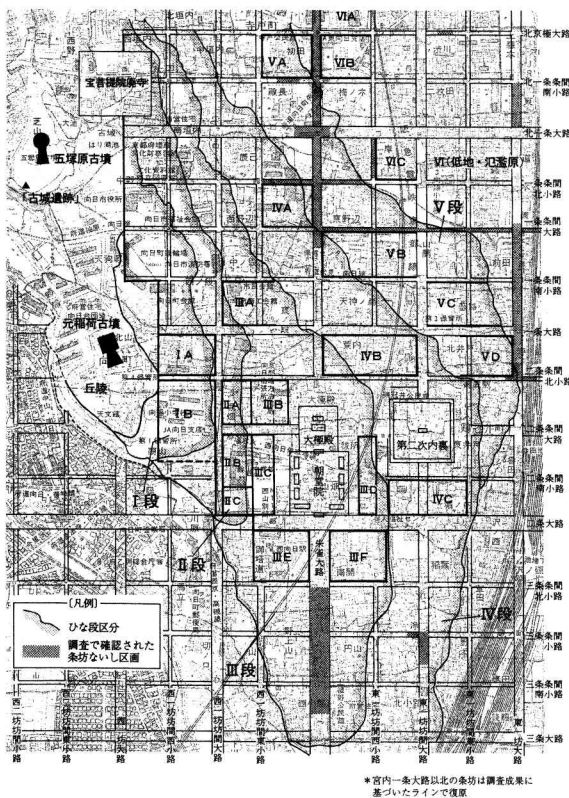


図5 國下氏による長岡宮と条坊の関係復元

瓦の出土も全体の四割となっており、同様の傾向は複廊遺構の調査でも認められることから造営過程の解釈には慎重な態度が要する。しかし、同区画内と想定される宮第一七八次調査では、一辺約一・五メートルの横板井篋組に復原される大型井戸とともに、平安宮内裏内郭回廊で確認されたような石組溝が検出されており、遺構群の構成要素が内裏空間として十分な条件を備えているといえる。

長岡京遷都は前述したように非常に急がれた特殊な遷都である。恭仁宮造営でみたように、遷都にあたってまず最も良好な場所に天皇の御在所である内裏が造営され、順次東に向かって平坦面の整地と主要殿舎の造営がなされたと考える國下氏らの意見に私も大いに賛同している。長岡宮の造営は「西宮」である第一次内裏と朝堂院の平坦面が最初に造成され、朝堂院では難波宮の殿舎を移築したために難波宮式軒瓦が出土する。そして、第二次内裏の造営は「西宮」が急遽造営された御在所であったため十分な生活空間や儀式空間が確保できず、宮城の中心としての内裏空間を新たに構築する必要性が生じたため、「東宮」として朝堂院の東に隣接して造営されたと考えられるのである。しかし、西から東へ順次平坦面を造成していく長岡宮では、第二次内裏が朝堂院よりもかなり低い位置に造営せざるを得なかった。実際に朝堂院の平坦面との比高差は約四メートルに及び、宮城内でも最も重要な施設である内裏に雨水などが流れ込む構造になってしまったのである。このような構造上の欠陥が平安京遷都の原因の一つになったことも充分考えられよう。以上のように、長岡宮は長岡丘陵上に新たに造成した平坦面を有効利用し、各施設を分置した宮城であり、その平面プランは方形に規制されることなく長岡丘陵の地形に規制されていたのである。

ただ、長岡宮は恭仁宮や難波宮とは異なり、正都として条坊の施工も当初から計画していた。これは発掘調査によって京内各地で条坊遺構が発見されている事実から間違いない。ところが、条坊の施工の基本原

理については定説をみないのが現状である。長岡京条坊は当初平安京と同様の「集積地割」条坊構造をもつと考えられていたが、平城京と同じ一八〇〇小尺で割り付けられたと考えられる条坊路が発見されるにおよび、平城京と同じ分割原理で条坊路が施工されたと考えられるようになる。とくに西二坊大路の発見は、路面中心が朝堂院中軸から三六〇〇小尺であることを明らかにし、長岡京が平城京と同じ「分割地割」条坊であることを示唆したのである。<sup>(64)</sup>その後、平城京型条坊で復元されつつも、条坊計画線に合致しない条坊路も多く見受けられ、とくに四条大路以南の東西路のズレは大きく構造原理の再検討が迫られていた。

条坊データの数理的解析に関しては、内田賢二氏や辻純一氏らによってなされている。<sup>(65)</sup>内田氏は長岡京条坊について(一)条坊は平城京型である(二)長岡京全体は同一のものさしを使用して造営されていた(三)長岡京全体が同一の方位を持って造営されていた、という仮定によって条坊座標系の復元を行い、一部側溝に計画線が対応する例があることや五条大路(現六条条間小路)が一〇丈南にずれを除外すれば、標準偏差プラスマイナス二メートルの精度で条坊が施工されていると結論づけた。データが四五地点のみの解析であり、後に辻氏が一〇七地点の条坊路に基づいて解析作業を行い、ある程度の法則性は読み取れるものの確かな計画性をもって施工されたとは考えられないと結論づけたように問題点も多く残されている。しかし、従来から指摘があったように五条以南のズレを以北と異なった大路あるいは宅地幅の差に求めようとする視点や、基本的に路面心に計画線が設定される平城京条坊との違いを示唆した点は、長岡京の構造を考えるうえで重要といえる。

このように平城京型条坊として検討されてきた長岡京条坊を、もう一度平安京と同じ「集積地割」条坊として捉え直したのが山中章氏である。山中氏の分析によれば、長岡京は基本的には四〇〇尺四方の「集積地割」条坊だが、「宮城南面街区」と「宮城西面街区」は幅三五〇小尺(一部

三七五小尺)に統一して、他の地域から規模・規格を異にすることで特別地域と認識するとともに、一般宅地面積の不均一性を解消したと考えた。<sup>(66)</sup>ただ、山中モデルにおいても実際に検出される条坊路が合致しない例が多く見受けられることから、これらの問題を発掘調査データから岩松保氏が再度解析を行っている。その結果、「三八五尺または四三五尺間隔に基準線を割り付けて町を設定するもので、小路は基準線の両側または片側の町から割り取るのに対して、大路はその幅分を割り付け幅に別個に付け加える」大路付加型モデルとして仮説を再提示し、「集積地割」条坊説に立脚する山中モデルの補正を行っている。また、長岡京ではもとは大きな都城計画があったが、当初は宮城と京の中心部分を重点的に建設し京の四至をあえて確定せず、ある時点で工事を再開することによって本来の都城をめざしたとした。<sup>(67)</sup>

長岡京では従来の北京極大路が小路幅で検出され、北京極大路のさらに北側でも条坊遺構が確認されるなど、京城の北辺も未確定な状態である。岩松氏は当初の北辺は北一条大路であり、北一条大路の南と北では条坊計画が異なることから、ここに造営の段階的差異を求めている。前述したように山中氏は北一条大路より北側の街区を「北苑」と考え、唐長安城を志向した完成された長岡京のイメージをもつが、長安城における「北苑」(禁苑)は宮城の北側、渭水との間に設けられた防衛的機能をもつ空間で、それとともに皇帝の狩猟や遊覧の場所でもあり天下の動物や植物が集められた特殊な小宇宙であった。<sup>(68)</sup>当然禁苑内に街区が形成されることはなく、その性格は北限での山河の違いはあるが平城京における松林苑にも踏襲されている。長岡京にみられる北辺街区は、検出された遺構の状況から長安城の禁苑や平城京の松林苑とは異質なものであり、条坊街区の

延長として捉えるほうが妥当ではなからうか。また、岩松氏が指摘する造営の段階差も、都城全体の条坊計画が当初から確定していたのであれば、段階的造営であっても条坊計画が途中で変更になるのは不自然である。平城京や平安京では遷都後の早い時期に計画範囲が確定しており、長岡京が異なった条坊計画で段階的に造営されたならば、京の造営原理自体が平城京や平安京とは根本的に異なることになる。実際に、長岡京北東域の条坊実態を検討した上田育子氏によれば、路面側溝の振り角が条坊路ごとによって大幅に異なっており、宅地幅も基本的には四〇〇小尺を志向しつつも山中氏や岩松氏が設定したモデルとはかなり異なる様相を明らかにされている。<sup>(69)</sup>

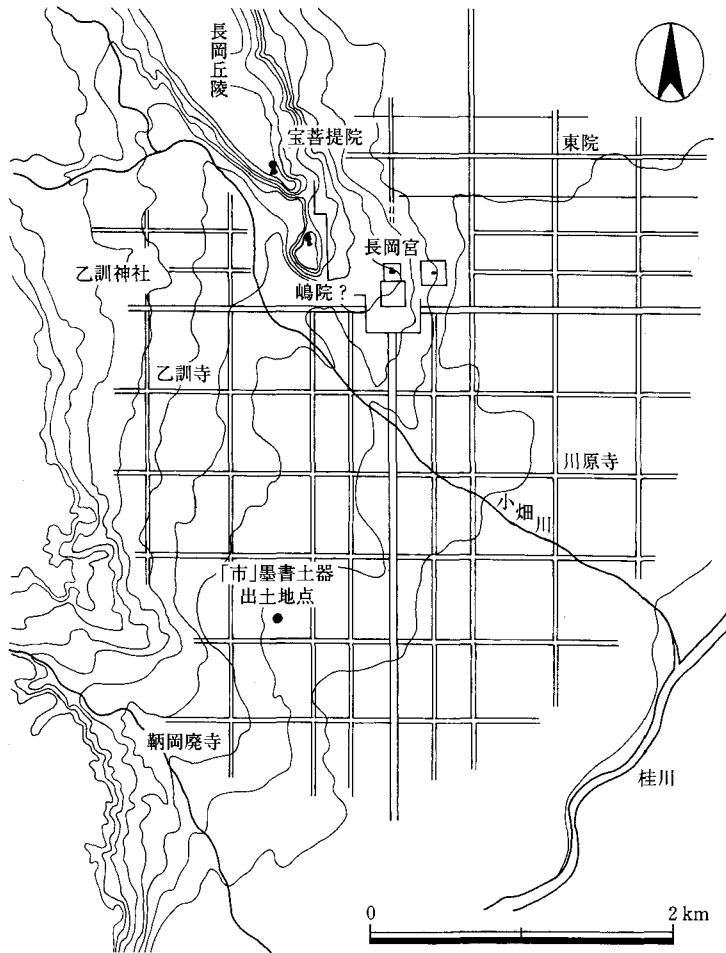


図6 長岡京推定復元図

前述したように、長岡京遷都の特殊事情から長岡丘陵上に宮城がまず造営されており、条坊プランは宮城の基準点から開放的に設定されていたと考えられる。その施工方法は「集積地割」条坊としてではなく、平城京のように一定の枠組みを中心基準点から順次規則的に設定していくほうが合理的であろう。長岡京条坊を平城京型（分割地割）条坊として再検討した鍋田勇氏によれば、南北条坊大路は平城京と同様に一八〇〇小尺で規則性を見出すことができると指摘する<sup>(70)</sup>。その内容は、東三坊大路と西二坊大路は路面心が朝堂院中軸線からほぼ一八〇〇小尺の計画線にのるが、東西一坊大路はそれぞれ東側溝・西側溝に基準線がほぼ合致する。また、東西条坊路も特殊な構造をもつ二条大路の南側溝付近に基準線をあわせれば、一条大路と三条大路心間が約三六〇〇小尺となり、その中心に二条大路南側溝がほぼのつてくるという。ちなみに、一条大路の中心から北一条大路北側溝までの距離が約一八〇〇小尺となっており、宮城の実態とは別に長岡丘陵が収まる二坊四方の大路がすべて計画線から内側に路面を設定しているのは、長岡京条坊の大きな特徴といえよう。つまり、長岡京は宮城が所在する長岡丘陵を中心に、同心円状に条坊街区が設定されていたと考えられ、その構造は郊外の「野」に連続する特殊な京域を構成していたのである<sup>(71)</sup>。当然、京極の設定は曖昧となり羅城門の存在も確認できないのである。

しかし、四条大路以南では宮城周辺とは別に条坊基準線が移され、同時に早い段階から条坊施工が行われたと考えられる。その背景には都城の経済的基盤である東西市の設置が考えられる。東西市の存在は、平安京に東西市を移す記事があるため確実で、おそらく宮城中心の基準点から第二基準点を五条周辺（おそらく朱雀大路上）に移し、東西市周辺の造営がなされたのであろう。東二坊大路の検出事例を検証すると四条大路を境として大路が約三〜四メートルほど食い違っており、前述したように東西路も四条大路以南では大きくずれてくることを考えると、四条

大路を境として宮城周辺条坊と市周辺条坊の施工が異なっていた可能性が高い。市周辺の発掘調査では右京六条二坊六町の調査で宅地の南門と六条条間南小路の北側溝が検出され、「市」銘墨書土器とともに市関連と考えられる木簡が多数出土した<sup>(73)</sup>。山中章氏はこれらの木簡の分析から長岡京の段階で市外町が充実したことを述べるとともに、平安京では対照的に条坊制四行八門の宅地割は成立しても市周辺の整備は遅れたと推測している<sup>(74)</sup>。しかし、平安京でも遷都直前の延暦一三年七月に東西市が遷されており、実際に右京八条二坊二町の調査では町の中心に位置する西庇南北棟建物の西に広がる湿地から長岡京と同様に五斗俵に使用された延暦期の荷札木簡が多量に出土しており、ヘラ状工具や糸巻きなど工房に関わる木製品も共伴することから、西市周辺域に設置された諸官司の出先機関が各所に存在したことを窺わせる<sup>(75)</sup>。条坊の施工過程は全く異なるが、長岡京でも平安京でも市周辺の整備は早くから行われ、雑多な経済活動がなされていたと想定される。

さらに寺院の造営も、延暦九年九月に皇太子病氣平癒のため「京下七寺」に読経させているが、これらの寺院はすべて乙訓地域に前代より存在した古代寺院であり、京造営に伴う伽藍整備はあっても新たな造営はなかった。そもそも条坊が施工された範囲に七寺も存在したかどうかも疑わしく、佐藤文子氏が指摘するように理念的に京域として認識された空間が長岡京に存在したことを示しているのではなからうか<sup>(76)</sup>。そのような意味においても、長岡京は計画的条坊を伴うが全体プランの中で宮城が造営される平城京とは異なり、恭仁宮や難波宮のように宮城の造営がまず先行して行われ、その京域にできるだけ計画的条坊を施工しようとした特殊な都城であったことが想定できる。その結果、様々な矛盾が造営過程の中で生じた想定できよう。これらのことから、桓武天皇の再度にわたる平安京遷都は、特殊な長岡京造営の中で実現することができなかった計画的都城の完成をめざして行われたと考えられるのである。

## おわりに

以上、藤原京から長岡京までの都城構造の変遷過程を検討してきた。

これら古代都城の構造を分析すると、大きく見て二つの形態が存在することが判明する。つまり、全体の京城条坊プランを計画的に設定し宮城もその計画線の中に収めていくタイプ（計画線閉合型）と、まず宮の造営を行い必要に応じて京城の条坊を施工していくタイプ（中軸線開放型）である。厳密に言えば、全体の方形地割計画線を設定する前者のタイプは「新益京」として造営整理された藤原京と、全体が同一基準のもとに北闕型都城として造営された平城京だけである。その他の都城は宮の造営が先行し、宮の造営中軸線あるいは東西計画線を基準にして京城街区が形成されていくが、京極が明瞭に現れない。

ここで問題となるのは、「京戸」との関係である。「京戸」とは京職によって戸籍で把握される「京」の一般住民や下級官人であるが、その存在については都城成立期にあたる大宝令時点で確認されている。その居住域は当然「京」として認識された空間と考えられるが、奈良時代の「中軸線開放型」都城においては京の内外の区別が行政区画として明瞭でなく、「京戸」の支配構造がどのように行われていたのか明らかでない。難波京や由義宮など摂津職あるいは河内職や郡レベルでの京城の管理は措くとしても、平城京から遷都された恭仁京などは文献史料上でも左右京に分かれており、京職による管理が行われたであろうが京極が領域的に認識されていた可能性は現実的には低い。

京と畿内との関係について北村優季氏は、「京戸」が周囲の戸と区別されるのは天皇の居所に本貫をもつという概念的な性格によるとし、実態として「京戸」も口分田が畿内諸国にあるため京と畿内の「二元的な生活」となり、日本の古代都城では「京戸」と畿内の区分が不明瞭となること

を指摘している<sup>17)</sup>。これに対し浅野充氏は、京と畿内が独立した行政区画として区別されながらも、国家によって畿内諸国と政治的一体性をもたされておき、「京戸」は様々な出身の人々が戸籍によって京に緊縛された一般民と捉える<sup>18)</sup>。つまり、「京戸」とは戸籍による個別人身支配によって生み出された宮周辺の特異な人々であり、京戸の居住領域が京としての特定の空間領域と対応しない場合も充分想定しうるのである。このような特徴をもつ日本の古代都城では、「京戸」の把握が戸籍上でできていれば京極のもつ意味はそれほど重要ではなく、京極の曖昧な「中軸線開放型」都城が常に創出される可能性をもっているのである。

ところで、「中軸線開放型」都城では官市は一箇所だけで機能していたが、長岡京は宮城の位置決定が先行するにもかかわらず、計画的条坊の施工を行い東西市が設定される。ここに長岡京の特殊性が見てとれるのではないだろうか。つまり、長岡京は宮の造営が先行するが、本格的な都城を目指したため京街区を別の基準で造営せざるをえなかった。とくに急がれたのは長岡丘陵を中心とする宮城周辺部と東西市周辺であり、このため京の造営基準点と宮の造営基準点が異なる結果となり、都城の形態としては大きな誤差を生じてしまったのではなからうか。長岡京はあくまで桓武天皇の造営した首都である。しかし、その特殊な造営過程が構造的矛盾を引き起こし、新たな都城造営の必要に迫られたのである。延暦一三年一〇月に平安京への遷都を行なうが、その造営は非常に時間を掛けて行われる。例えば、延暦一〇年九月に平城宮諸門を解体して長岡宮に運ばせるが、このとき解体・運搬を割り当てられた国々と平安宮諸門の造営を割り当てられた国々が一致しており、私見ではこの平城宮諸門の解体は平安宮への資材搬入を睨んだ動きと考えている。また、延暦一二年正月には長岡宮解体のために東院に遷御しており、少なくとも延暦一一年の諸院巡覧は長岡宮廃都の準備を目的としたものである可能性が高い。そして、もしも延暦一〇年の下半期から遷都が構想されて

いたのならば、遷都の三年前から下準備として平安宮の設計が行われていたと考えられ、東院遷御に伴う遷都の公式発表後に長岡宮の解体が急遽始められ、平安宮および京の造営が計画線閉合型として全体プランに従って進められたと考えられる。

平安京の造営原理については、従来より「集積地割」条坊として認識されており、平城京など一定の全体枠から道路など諸部分を機械的に割り出していく「分割地割」方式と対立する概念として捉えられていた。

実際に均一な方形区画から街区を割り出す平城京は、占有する道路幅によって宅地面積が異なっており、京内すべての町を四〇〇小尺で統一する平安京とは全く異なる構成原理といえる。しかし、以前より指摘するように、平安京は宮城計画線を東西四〇〇小尺、南北四七〇小尺で定め、それらを均等分割した東西五〇〇小尺、南北四七〇小尺の基準線から一定の規則に基づいて道路幅を分割すれば宮城南・東・西街区の幅が四〇〇小尺に統一できる。他の京域も基本的に平城京と同じく一八〇〇小尺を基準線として四〇〇小尺の幅を確保しており、原則的に平城京の「分割地割」方式を発展させた地割原則によっているのである。平城京との大きな違いは、平城京が全体を均一な方形計画線として施工したのに対し、平安京の造営は計画線を均一にするのではなく、一町の大きさと一定の道路幅を確保するために最初に宮城の基準線を定めたところにある<sup>(7)</sup>。そういう意味では、平城京と平安京を対立する都城と捉えるよりも、平城京からの構造原理の連続性を重視し、平安京の中に「計画線閉合型」都城の極度に完成させた姿をみてとることができるのである。

長岡京条坊は宮城が所在する長岡丘陵を中心に、条坊計画線を平城京と同様の一八〇〇小尺に定めて開放的に設定し、その規制の中で宅地面積を一定にしようとしたため、様々な構造的矛盾を孕んでしまったのであろう。平安京は長岡京がもつ古代都城の二つの形態属性、つまり「中軸線開放型」と「計画線閉合型」の融合した構造を修正し、「分割地割」

条坊をもつ平城京の構造的欠点を止揚した中で完成した都城であったといえる。ただ、平城京以上に機械的割り付けがなされており、京内唯一の官寺である東・西寺が九条大路に面して羅城門の東西に配置されるなど、利便性よりも象徴的な面がより強く意識されていた。その後、嵯峨朝以降において桓武天皇が目指した理想的都城の内的変質が起こり、皮肉にもその結果平安京が都市として独自の発展を遂げ始めるのである。

註

- (1) 岸俊男「飛鳥と方格地割」『史林』第五三巻第四号 一九七〇年 後に『日本古代宮都の研究』(岩波書店 一九八八年)に所収
- (2) 浅野充「律令国家と宮都の成立」『ヒストリア』第一二二号 一九八九年
- (3) 仁藤敦史「倭京から藤原京へ—律令国家と都城制—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第四五集 一九九二年 後に『古代王権と都城』(吉川弘文館 一九九八年)に所収
- (4) 相原嘉之「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地」『条里制・古代都市研究』通巻一五号 一九九九年  
同「飛鳥地域における空間利用形態についての一試論—掘立柱建物の統計的分析を通して—」『明日香村文化財調査研究紀要』創刊号 二〇〇〇年
- (5) 林部均「飛鳥の諸宮と藤原京の成立」『古代王権の空間支配』青木書店 二〇〇三年
- (6) 網伸也「古代研究の動向」『日本考古学年報』五三(二〇〇〇年度版) 日本考古学協会 二〇〇二年
- (7) 榮原永遠男「奈良時代の流通経済」『史林』第五五巻第四号 一九七二年 後に『奈良時代流通経済史の研究』(塙書房 一九九二年)に所収
- (8) 岸俊男「飛鳥から平城へ」『古代の日本』五(近畿) 角川書店 一九七〇年 後に『日本古代宮都の研究』(前掲書)に所収
- (9) 井上和人「古代都城制地割再考」『奈良国立文化財研究所研究論集』七 一九八五年 後に『古代都城制条里制の実証的研究』(学生社 二〇〇四年)に所収
- (10) 藤原京に関する研究史は、以下の著書で簡潔にまとめられているので参照されたい。  
八木充「研究史飛鳥藤原京」吉川弘文館 一九九六年  
中村太一「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』第五八二号 一九九六年  
同「藤原京の『条坊制』」『日本歴史』第六一二号 一九九九年

- (10) 小澤毅「古代都市「藤原京」の成立」『考古学研究』第四四卷第三号 一九九七年 後に「日本古代宮都構造の研究」(青木書店 二〇〇三年)に所収
- (11) 花谷浩「京内廿四寺について」『奈良国立文化財研究所研究論集』一一 二〇〇〇年
- (12) 林部均「藤原宮と「藤原京」―条坊制導入期の古代宮都の「様相」―」『古代学研究』一四七号 一九九九年 後に「古代宮都形成過程の研究」(青木書店 二〇〇一年)に所収
- (13) 阿部義平「新益京について」『千葉史学』九号 一九八六年  
大脇潔「新益京の建設」『新版古代の日本』六(近畿) 角川書店 一九九二年  
花谷浩「京内廿四寺について」(註11前掲論文)
- (14) 井上和人「藤原京―新益京造営に関する諸問題―」『仏教芸術』一五四号 一九八四年  
小澤毅「藤原京の造営と京城をめぐる諸問題」『日本古代宮都構造の研究』(前掲書)
- (15) 林部均「藤原京の「朱雀大路」と京城―最近の藤原京南辺における発掘調査から―」『条里制・古代都市研究』第二〇号 二〇〇四年
- (16) 小澤毅「藤原京の条坊と寺院占地」『古代』第一一〇号 二〇〇一年 後に「日本古代宮都構造の研究」(前掲書)に所収
- (17) 近江俊秀「七世紀後半の造瓦の一形態―明日香村小山廃寺を中心として―」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 一九九九年
- (18) 大脇潔「大安寺―百濟大寺から大官大寺へ―」『シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所 一九九五年  
中井公「大安寺―大官大寺から大安寺へ―」『シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える』(同右)
- なお、高市大寺の位置については、雷丘北方遺跡の他に木ノ本廃寺に比定する説と小山廃寺に比定する説などがある。木ノ本廃寺は「百濟大寺」に比定される古備池廃寺との同范瓦が多く出土することから高市大寺の有力地であるが、寺院に関連付けられる遺構が全く検出されておらず詳細は不明である。また、小山廃寺は藤原宮や本薬師寺との位置関係から官寺にふさわしい場所に造営されているが、前述したように官の大寺とするには規模が非常に小さく、造営時期も条坊が施工された天武天皇五年以降であり、天武天皇二年に移建された高市大寺とは条件的に合致しない点が多い。しかし、雷丘北方遺跡についても寺院遺構は検出されておらず、現状では高市大寺の位置は不明としか言いようがなく、今後の発掘調査によって明らかにしていく必要がある。
- (19) 岸俊男「大和の古道」『日本古文化論叢』吉川弘文館 一九七〇年 後に「日本古代宮都の研究」(前掲書)に所収
- (20) 仁藤敦史「倭京から藤原京へ―律令国家と都城制―」(註3前掲論文)
- (21) 仁藤敦史「倭京から藤原京へ―律令国家と都城制―」(註3前掲論文)  
林部均「藤原宮と「藤原京」―条坊制導入期の古代宮都の「様相」―」(註12前掲論文)
- 山中章「古代宮都成立期の都市性」『都市社会史』新体系日本史六 山川出版社 二〇〇一年
- なお、仁藤氏と山中氏は不整形に拡大した「新城」・「新益京」条坊が文武朝藤原京において岸説の二条八坊に再構成されると考えているが、林部氏は大藤原京の発掘調査成果から広域の条坊が一連のものとして藤原宮期に造営されていることを明らかにした。そして、文武朝藤原京についても、京極の確定的データに乏しいとして不整形な条坊形態を想定している。
- (22) 稲田孝司「古代都城の性格と都城制研究」『日本史研究』一三六号 一九七三年
- (23) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅱ」一九六二年
- (24) 井上和人「古代都城制地割再考」(註8前掲論文)
- (25) 大和郡山市教育委員会(財)元興寺文化財研究所「下三橋遺跡第一次発掘調査現地説明会資料」二〇〇五年
- (26) 井上和人「平城京羅城門再考」『条里制・古代都市研究』第一四号 一九九八年 後に「古代都城制条里制の実証的研究」(前掲書)に所収
- (27) 井上和人「平城京の実像―造営の理念と実態―」『研究論集XIV 東アジアの古代都城』奈良文化財研究所 二〇〇三年 後に「古代都城制条里制の実証的研究」(前掲書)に所収
- 小澤毅「平城京の条坊と宅地」『日本古代宮都構造の研究』(前掲書)
- (28) 山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第三八卷第四号 一九九三年 後に「日本古代都城の研究」(柏書房 一九九七年)に所収
- (29) 武田和哉「平城京外京条坊制考―興福寺伽藍中心線との位置関係について―」『奈良古代史論集』第三集 一九九七年
- (30) 井上和人「平城京の条坊設定方式―山中章氏の説に対する批判―」『奈良文化財研究所紀要』二〇〇二・二〇〇二年 後に「古代都城制条里制の実証的研究」(前掲書)に所収
- (31) 井上和人「平城宮東院地区の造営年代」『奈良文化財研究所紀要』二〇〇二・二〇〇二年 後に「古代都城制条里制の実証的研究」(前掲書)に所収
- (32) 小澤毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会 一九九三年 後に「日本古代宮都構造の研究」(前掲書)に所収
- (33) 田辺征夫「遷都当初の平城京をめぐる一・二の問題」『文化財論叢』三 奈良文化財研究所 二〇〇二年
- (34) 網伸也「平安宮の造営と瓦生産」『古代文化』第五七巻第一号 二〇〇五年

- (35) 山田邦和「『前期平安京』の復元」『都市 前近代都市論の射程』青木書店 二〇〇二年
- (36) 石毛彩子「平城京内寺院における雑舎群」『古代』第一一〇号 二〇〇一年
- (37) 中尾芳治「前期難波宮をめぐる諸問題」『考古学雑誌』第五八巻第一号 一九七二年 後に『難波宮の研究』(吉川弘文館 一九九五年)に所収
- (38) 積山洋「孝徳朝の難波宮と造都構想」『大阪における都市の発展と構造』山川出版社 二〇〇四年
- (39) 岩本次郎「副都難波京」『古代を考える 難波』吉川弘文館 一九九二年
- (40) 積山洋「古代都市難波京の諸段階」『巨大都市大阪と摂河泉』雄山閣出版 二〇〇〇年
- (41) 植木久「後期難波宮と難波京—平城宮、長岡京との比較をもとに—」『条里制・古代都市研究』第一六号 二〇〇〇年
- (42) 網伸也「四天王寺古代瓦の再検討—平安宮豊楽院同范瓦によせて—」『ヒストリア』第一四〇号 一九九三年
- (43) 小澤毅氏の考察によれば、恭仁宮大極殿が平城宮中央区の大極殿を移築したもので、さらに藤原宮大極殿を平城遷都時に移築した建物である可能性が高いという。
- (44) 小澤毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会 一九九三年 後に『日本古代宮都構造の研究』(前掲書)に所収
- (45) 足利健亮「日本古代地理研究」大明堂 一九八五年
- (46) 京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」二〇〇〇年
- (47) 高橋美久二「恭仁京」『日本古代道路事典』八木書店 二〇〇四年
- (48) 山城町教育委員会「史跡高麗寺跡」京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第七集 一九八九年
- (49) 栄原永遠男「紫香楽宮とその時代(付、禾津頓宮・保良宮)」『近江・大津になぜ都は営まれたのか—大津宮・紫香楽宮・保良宮—』大津市歴史博物館 二〇〇四年
- (50) 福山敏男・中山修一・高橋徹「新版長岡京発掘」日本放送出版協会 一九八四年
- (51) 國下多美樹「長岡京研究一〇〇年—長岡京遺跡学の提唱—」『都城』一一二〇〇年
- (52) 小林清「長岡宮の新研究(全)」比叡書房 一九七五年
- (53) 山中章氏の長岡宮研究については、以下の文献で総括されている。
- (54) 山中章「日本古代都城の研究」柏書房 一九九七年
- (55) 同「長岡京研究序説」塙書房 二〇〇一年
- (56) 清水みき「長岡京造営論—二つの画期をめぐる—」『ヒストリア』第一一〇号 一九八六年
- (57) 山中章「長岡宮城南面と北辺の造営」『条里制研究』第八号 一九九二年 後に『長岡京研究序説』(前掲書)に所収
- (58) 山中章「長岡京東院の構造と機能—長岡京「北苑」の造営と東院—」『日本史研究』第四六一号 二〇〇一年
- (59) 中塚良・中島信親「長岡宮跡第三九〇次—長岡宮北辺官衙(南部)、宮内北一条大路—」『朝堂院中軸道路』(宮内朱雀大路)、殿長遺跡/発掘調査報告「長岡京跡・物集女車塚周辺遺跡」向日市埋蔵文化財調査報告書第六一集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 二〇〇三年
- (60) 向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター「長岡宮跡第三七三次調査記者発表資料」一九九九年
- (61) 財団法人向日市埋蔵文化財センターの國下多美樹氏および中島信親氏のご教示による。
- (62) 秋山浩三「長岡宮跡第二六七次—朝堂院西方官衙、乙訓郡衙—発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第三六集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 一九九三年
- (63) 山中章「長岡宮城南面と北辺の造営」(註53前掲論文)
- (64) 調査を直接担当した財団法人大阪府文化財センターの秋山浩三氏からご教示を得た。
- (65) 國下多美樹・中塚良「長岡宮の地形と造営—丘と水の都—」『財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城』一四二—二〇〇三年
- (66) 秋山浩三・山中章「長岡宮跡第一九三次—西辺官衙、南山遺跡—発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第二九集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 一九九〇年
- (67) 國下多美樹「遷都と土器の供給」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会 二〇〇二年
- (68) 渡辺博「長岡宮跡第一七八次—朝堂院西方官衙—発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第二二集 向日市教育委員会 一九八八年
- (69) 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第二六次発掘調査概要—埋蔵文化財発掘調査概報(一九八〇—二〇〇〇)—」京都府教育委員会 一九八〇年
- (70) 内田賢二「長岡京条坊復元のための平均計算」『長岡京』第三二号 一九八四年
- (71) 辻純一「長岡京条坊復元における一考察」『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第一号 一九九四年
- (72) 山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第三八巻第四号 一九九二年 後に『日本古代都城の研究』(前掲書)に所収
- (73) なお、京内の特別区域といっても実際に大型邸宅などが立ち並ぶのは「宮城東面街区」が中心で、「宮城西面街区」あるいは「宮城南面街区」が京内でどこまで



特殊化されているのかは、今後の発掘調査成果から再検討する必要がある。また、特殊地域と認識しながら、なぜ三五〇小尺や三七五小尺という変則的な宅地幅に統一したのか、また、実際現地でのようになっているかのような変則的地割を測量し実現できたのか明らかにされておらず、問題点は多く残されている。

- (67) 岩松保「長岡京の条坊計画―長岡京条坊制補論―」『長岡京の完成度―長岡京の施工状況と遷都・廃都の事情―』『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第二八冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査センター 二〇〇〇年
- (68) 妹尾達彦「長安の都市計画」講談社 二〇〇一年
- (69) 上田育子「長岡京北辺域の条坊」『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区』古代学研究所研究報告第七輯 財団法人古代学協会 二〇〇二年
- (70) 鍋田勇「長岡京条坊制地割計画の再検討(上)・(下)」『京都府埋蔵文化財情報』第四八号・第四九号 一九九三年  
 なお、東二坊大路に関しては、鍋田氏の分析では路面心から四・六メートルほどの誤差が生じている。鍋田氏によれば東一坊大路東側溝と東三坊大路西側溝の中心を求めることによって近似値を得ることができるとするが、実際の条坊設定において現地ではそれほど難しい方法はとらないと思う。やはり、測量誤差の中で捉えるべきではなからうか。
- (71) 佐藤文子「郊野の思想―長岡京域の周縁をめぐって―」『京都市歴史資料館 紀要』第一二号 一九九五年  
 網伸也「長岡京北西域の開発」『古代東国の考古学 大金宣亮氏追悼論文集』慶友社 二〇〇五年
- (72) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第一七冊 一九九八年
- (73) 中島皆夫「右京第六八八次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成一二年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 二〇〇二年
- (74) 山中章「市と文字」『文字と古代日本三 流通と文字』吉川弘文館 二〇〇五年
- (75) 網伸也「木簡」『平安京提要』角川書店 一九九四年
- (76) 佐藤文子「郊野の思想―長岡京域の周縁をめぐって―」(註71前掲論文)
- (77) 北村優季「京戸について―都市としての平城京―」『史学雑誌』第九三編第六号 一九八四年
- (78) 浅野充「律令国家における京戸支配の特質」『日本史研究』第二八七号 一九八六年
- (79) 網伸也「平安京の造営計画とその実態」『考古学雑誌』第八四卷第三号 一九九九年

図版出典

- 図1 註11花谷論文掲載図に若干加筆
- 図2 平城京 註10小澤論文掲載図  
 難波京 註41植木論文掲載図を再トレース  
 恭仁京 註46高橋論文掲載図
- 図3 註45報告書掲載図
- 図4 (財)向日市埋蔵文化財センター「都城」一四付図に加筆
- 図5 註61國下・中塚論文掲載図
- 図6 註67岩松論文掲載図を原図として作成

(財団法人京都市埋蔵文化財研究所、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
 (二〇〇六年五月三十一日受理、二〇〇六年八月一日審査終了)

---

## Two Forms of Ancient Walled City : Nagaoka-kyo Viewed from the Perspective of its Form

AMI Nobuya

The adoption of a block street pattern for the space of the “capital” (“kyo”) in ancient walled cities began during the Temmu era when Fujiwara-kyo (Aramashi-kyo) was built following a planned grid pattern. The existence of a grid pattern as a fait accompli for capitals with palaces from the time of Heijo-kyo onwards has been the subject of debate. However, as the location of imperial power, the capital was a space that was visually and conceptually separated from the surrounding area so that in essence the presence of a grid pattern for the streets was not an absolute requirement to make it a capital. In fact, little consideration was taken of the existence of a grid pattern for streets within the concept of a capital during the Nara period. We know that a special political sector that expanded outward from a palace at the center was viewed as constituting a capital. We may also assume that even when streets were built in a capital with an enclosed palace there were instances when a planned grid pattern was adopted and others in which streets were built as the need arose.

This paper considers Fujiwara-kyo which was built at a time when walled cities were first established in Japan. It discusses the process by which ancient walled cities were built and investigates the capitals of the Nara period, of which Heijo-kyo was the first. The findings reveal that either one of two structures was adopted for these ancient walled cities. One entailed a planned grid pattern for the entire capital with a palace incorporated in the plan (planned closed type), while in the other type the palace was built first and a grid pattern implemented for the area of the capital as the need arose (central axis, open type). Strictly speaking, the first type with its grid pattern covering the entire area applies to only the Fujiwara and Heijo capitals. However, following a change to its underlying principle, this structure was also most likely adopted for the Heian capital. In other walled cities the construction of the palace occurred first, whereupon the streets were created based on the palace located along a central axis, or on a line projecting east to west. In the case of Nagaoka-kyo too, the palace was built first, and because an attempt had been made to build a unique walled city following a planned grid pattern wherever possible, the result included some structural contradictions. It is possible that Emperor Kammu shifted the capital to Heian for a second time with the aim of completing the planned walled city that he was unable to achieve when building Nagaoka-kyo.